情報とメディアに関する領域

ネットの書き込みの特性を知り「上手なリスクの見積もり方」を考える



LINEヤフー株式会社 サステナビリティ推進CBU CSRユニット 西尾勇気／常葉大学教育学部 学校教育課程准教授 酒井郷平

情報とメディアに関する領域

ネットの書き込みの特性を知り「上手なリスクの見積もり方」を考える

LINEヤフー株式会社 サステナビリティ推進CBU CSRユニット　西尾勇気／常葉大学教育学部　学校教育課程准教授　酒井郷平

LINEヤフー　みらいプロジェクト　誹謗中傷防止教材「“ネットの書き込み”に対する「上手なリスクの見積もり方」を考えよう」：
https://mirai.landpress.line.me/trouble/hibouchushou/

LINEヤフー株式会社では、CSR活動（社会貢献活動）の一環として、「デジタルリテラシー支援」を重点テーマにさまざまな教材の提供を行っています。文部科学省が推進する「GIGAスクール構想」に適合した活用型情報モラル教材「GIGAワークブック」など、学校教育での活用を前提とした取組にも力を入れており、授業時間を考慮した作り込みはもちろん、生徒が使用するワークシートや、教員を支援するための講師用ガイドブックも用意するなど、「使いやすさ」を重視した教材づくりがされています。

こうした中で、2025年２月に公開された「“ネットの書き込み”に対する「上手なリスクの見積もり方」」が注目を集めています。リスクがあるものを忌避せず、上手に情報を活用していくことに主眼が置かれたこの教材の特長や作成にあたっての工夫などについて、LINEヤフー株式会社の西尾勇気氏と、共同研究者である常葉大学教育学部学校教育課程准教授の酒井郷平氏にお話を伺いました。

リスクのグラデーションに気づき、子どもたちの「自ら見積もる」力を育てる

▶LINEヤフーとしてのこれまでの消費者教育の取組について教えてください。

西尾氏）

情報モラル・情報リテラシー教育の取組は、LINE株式会社（当時）のCSR活動として2012年から始まっています。2011年にインターネット上でLINEいじめ（LINEのグループ機能内での無視や仲間外れ、悪口の書き込み）という言葉が出現し、社内では自社サービスに関連する社会課題に対してどんな対応ができるのかを議論しました。そこで考えられた施策の一つが情報リテラシー教育の取組でした。LINEいじめとは何なのか、SNS上で起きるさまざまなトラブルに関してネッ

トとリアルの違いは何なのかといった共同研究を静岡大学と始め、そこからSNSに関連する情報モラルの教材を開発するようになり、東京都教育委員会をはじめとした自治体と連携した取組も行ってきました。

SNSでのトラブルは１対１のコミュニケーションでの行き違いから、グループトークのような顔見知りの中で起こる誤解、オープンな場での顔もわからない不特定多数の人たちのコミュニケーションで発生する誹謗中傷などさまざまです。また当時社会的にも「寿司テロ」（回転寿司店で迷惑行為を行いその動画をSNSに投稿する）のような事件があり、SNSの使い方が問題視された時期でもありました。SNSをベースとした会社として、その対策に取り組む必要があったことに加えて、学校教育の現場でも情報リテラシー教育のニーズが高まったという背景もあります。

▶「“ネットの書き込み”に対する「上手なリスクの見積もり方」」（以下、本教材）制作の背景や教材としての特長について教えてください。

酒井氏）

背景として、一つは小中高生のネットの書き込みに対するトラブルの増加で問題意識が高まっていたこと。もう一つは、教育現場で行われている情報モラル教育が、「悪口を言わないようにしよう」「こういうことは書き込まないようにしよう」という極端な指導になりがちであるという問題意識がありました。

本教材のポイントは、情報の危険性とはどのようなことなのかを理解することにあります。これからの社会を生きていく中で、情報と接したり発信したりすることは必要になります。一括りに書き込むことを危険と考えるのではなく、何を書き込むと危険なのか、どういう部分であれば書き込んで大丈夫なのかを、「自ら考える」ことの大切さを伝えることを重視しています。

たとえば、「殺害予告」のような過激な書き込みや、嘘の発信などは、「してはいけないこと」であると誰でもわかります。一方で、食べ物を食べて「おいしくなかった」という「感想」を発信したのに、それが「悪口」と受け止められるケースもあります。情報の危険性というのは必ずしも白黒ではなく、一概に「絶対ダメ」とは言えないあいまいな部分が必ずあるのです。こうした「リスクのグラデーション」に気づき、発信する際に自ら「リスクを見積もる」ことができるようになるのが本教材の目的です。

具体的なケースを想定して自分ならどうするかを考え
周囲の人の考えと比べながら議論する

▶教材の具体的な内容について教えてください。

酒井氏）

従来の教材は危険性を指摘し、結論を教える教材が多かったのに対して、本教材はグループワー

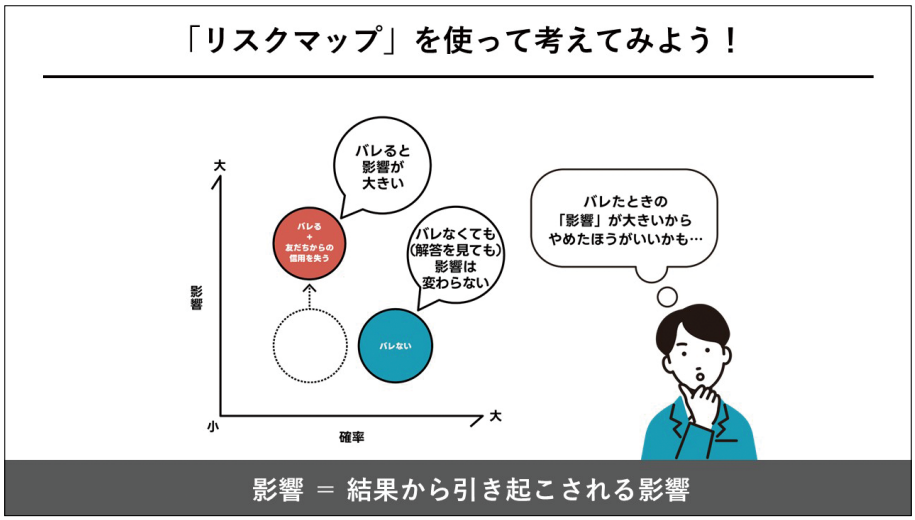
クを通して「リスクと向き合う」ことを学ぶ内容となっています。

ポイント①　導入

最初にアイスブレイクとして、「教室の掃除をしていた時に仲の良い友達のテストの答案用紙を見つけた」という設定を与えて、どう対応するのかを、一人ひとりがリスクマップをつくって考えます。

たとえば、「こっそり点数を見る」という対応をしたとすると、うまくすれば「相手の点数を知る」ことができる一方、最悪の場合「バレて友達の信用を失う」というリスクがあります。それぞれがどれくらいの確率で起こると思うかも考えます。これにより、「実は誰しも行動する際には、必ずその結果に対する確率や影響（リスク）を見積もっている」ことを認識します。さらにそれぞれのリスクマップをほかの人と共有して比較することで、自分の思っていることが現実とズレていないかを考えます。





学校生活で身近な出来事を「リスクマップ」上で考える

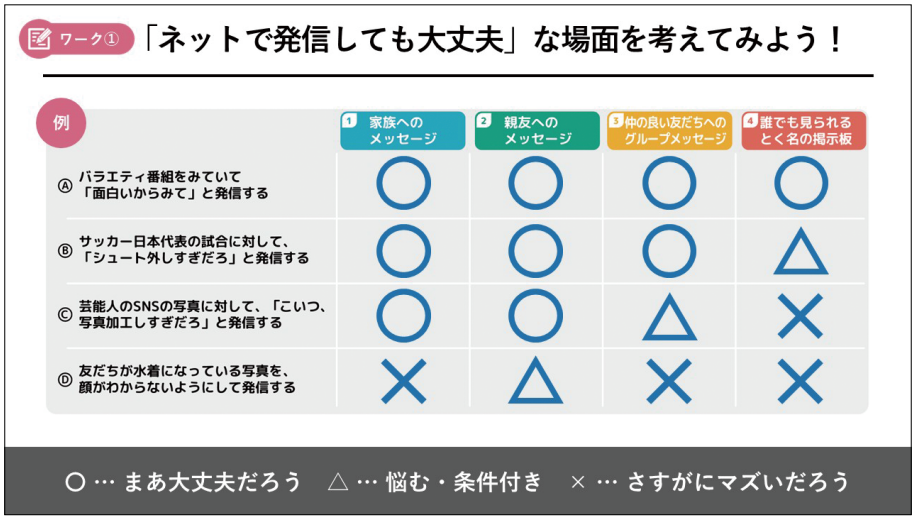
ポイント②　リスクの見積もり（加害者視点）

次に、「ネットで発信しても大丈夫」な場面を考えるワークを行います。

公開範囲（家族／親友／仲の良い友達グループ／匿名掲示板）と発信内容（番組のおすすめ、試合への不満、芸能人写真への批判、友達の水着写真の共有）を組み合わせたマトリックスを作り、各マスに「〇＝まあ大丈夫」「△＝悩む・条件付き」「×＝マズい」で評価します。各自の結果をグループ内で共有・比較し、「×になる条件」や「影響が高まる要因」を議論し、内容と場（公開範囲）をセットでリスクの見積もりを理解していきます。

記入結果をグループで共有し、判断が変わる条件（〇・△が×になる場面）や、トラブルの起こりやすさ／影響の大きさが高まる要因を理由とともに議論します。内容と公開範囲の組み合わせで「許容範囲」が変わること、そして発信内容と場所をセットでリスクを見積もる必要があることを学びます。





加害者の視点に立って、発信の是非を考える

ポイント③　自分が被害にあった場合（被害者視点）

続いて、トラブルが起きた場合に「どう対応し、誰に相談するか」を考えるワークを行います。

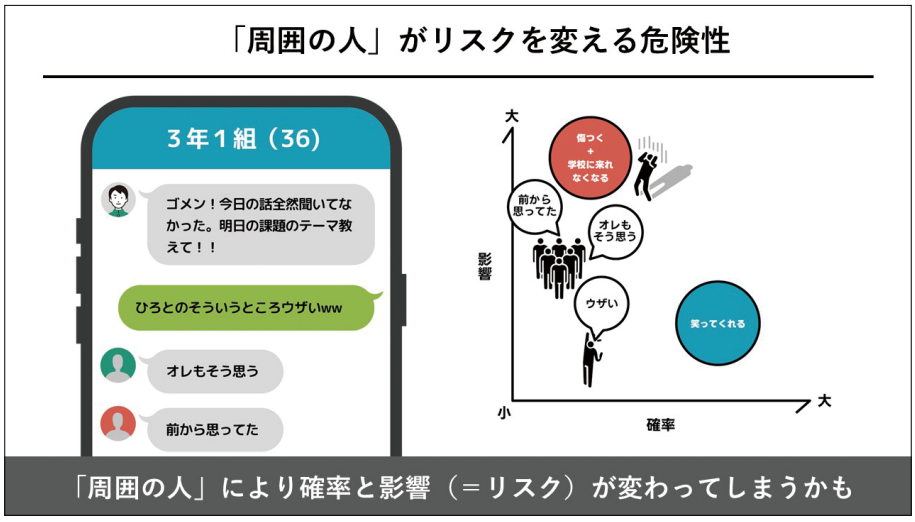
自分の投稿（例：「合格マスクつくった」写真付き）のコメント欄に匿名の書き込みが来た想定で、内容別に相談先をマトリックスで整理します（例：「服が派手」「バカ」「カンニング疑惑」「個人特定」）。相談先は「友達」「家族・先生」「通報機能」「警察」から選び、結果を共有して議論します。話し合いを通じて、「相談してよい／すべき」判断や、警察相談が必要となる水準など、あいまいな境界線を先生も含めてクラスで言語化していくことをねらいとしています。



被害者の視点に立ち、具体的な相談先を事態の深刻さを踏まえ、考える

ポイント④　加害者を後押しする「周囲の人」（周囲の視点）

最後に、書き込んだ人（加害者）、書き込まれた人（被害者）だけでなく、加害者を後押しする「周囲の人」という視点があることも伝えます。「周囲の人」の存在が、誹謗中傷をより激しいものにしたり、投稿を炎上させたり、リスクを変化させることにもつながります。書き込みだけでなく、「周囲の人」にならないことも気をつけなければならないことを理解します。



ネットの危険は、直接的な被害者・加害者の構図だけにとどまらないことを示す

これらのワークは、一方通行の講義ではなく、子どもたちが対話を通して主体的に考える授業を意識しています。自分と他者の考え（価値観）を比べながら気づきを得ることを重視し、結論や「正解」を与えるのではなく、各自が見いだした学びを大切にするスタンスです。また、ボーダーラインはこの場では引けても、場面や社会が変われば異なり得ることまで視野に入れ、「答えが一つではない」ことに向き合う姿勢を育てます。

▶従来の情報モラル教育と比較して、改善を意識した点や重点を置いた点はありますか。

西尾氏）

開発時に重視したポイントを挙げると、一つは、「自分事化」です。こうした教材では最初の段階で「自分事化」してもらうことが学びを促します。脅したり、怖い話にしてしまったりだとなかなか自分事化にならないので、導入の部分は気を使っています。アイスブレイクも含めて、ロジカルな流れにすることを意識しています。

また、誹謗中傷をはじめとしたネットでの書き込みに関するトラブルは、多くの場合「正義感」が絡んでいて、悪口のつもりではなく、自分の正義感から発信しているというケースがかなり出てきます。たとえば、本教材の最後で触れている「周囲の人」の多くは、背景を知らずに切り取られた情報だけを見て、正義感から発言するパターンが多く、それが結果的に被害者に重くのしかかることになります。そこで、「加害者」「被害者」だけでなく、「周囲の人」になってしまうリスクについても考えるようにしています。そのうえで、善悪でなく、グラデーションで考え、リスクを見積もるというトレーニングをしてもらうというのが本教材のこだわりです。

本教材では開示請求など一部法的な話も出てきます。「法的な線引きがされている部分もある」ということを示していることも、これまでの教材ではなかった部分です。

▶制作における工夫点、大切にしたことなどはありますか。

西尾氏）

基本的には学校で活用してもらうことを意識してつくっています。50分の授業の中で一通り完結できることや、前もって準備することなく使えるよう、指導する先生方のためのガイドブックも用意するなど、使い手に取って扱いやすいものになるように工夫しています。

▶学校での使用を意識するというのは重要な視点ですね。

西尾氏）

一人でも多くの人に届けることを考えると、活用する場面にどれだけフィットするかが重要だと思います。良い教材であることが伝わったとしても、実際にそれを使ってもらうまでにはさまざまな障壁があります。特に情報モラル分野は、まだまだ受験に直接関係ない科目だと意識されてい

て、現場のニーズがあっても活用が進まないというのが現状です。こうした背景もあり、先生方が活用したいと思った時に、準備を必要とせずにすぐに使える教材であることを意識しています。

私たちは「GIGAワークブック」という活用型情報モラル教材も提供していて、多くの地域で導入いただいているのですが、本教材の内容を新年度の「GIGAワークブック」に反映しています。「GIGAワークブック」を導入されている学校であればそのまま使えるので、これを機に活用が進んで欲しいと思っています。

▶LINEヤフーと常葉大学の共同研究ということですが、役割分担のようなものはあるのでしょうか。

西尾氏）

コンテンツそのもののハンドリングなどは酒井先生を中心とした研究室のメンバーに担当していただいています。私共もリクエストを出したり、模擬授業でテストをしたりという形ではコンテンツに関わっていますが、主たる役割は教材をわかりやすい場所に置いてダウンロードしてもらいやすくしたり、各所の教育委員会や自治体と連携したりといった窓口となることです。

トラブル回避だけでなく情報をうまく活用できるようになることが重要

▶本教材の利用状況はいかがでしょう。反応などはありますか。

西尾氏）

現時点で18都県の教育委員会と、53市町の教育委員会で導入されています。（汎用版の活用も含めると、現時点で21都県の教育委員会と、102市町村の教育委員会）2026年に入ってから、SNSで暴力動画が出回って騒がれることがありましたが、文部科学省から３学期にこうした事態に対応する学習をするようにアナウンスがあり、テーマ的に合致する本教材が注目されて、実際に活用された先生から感謝の言葉をいただいたケースがあります。

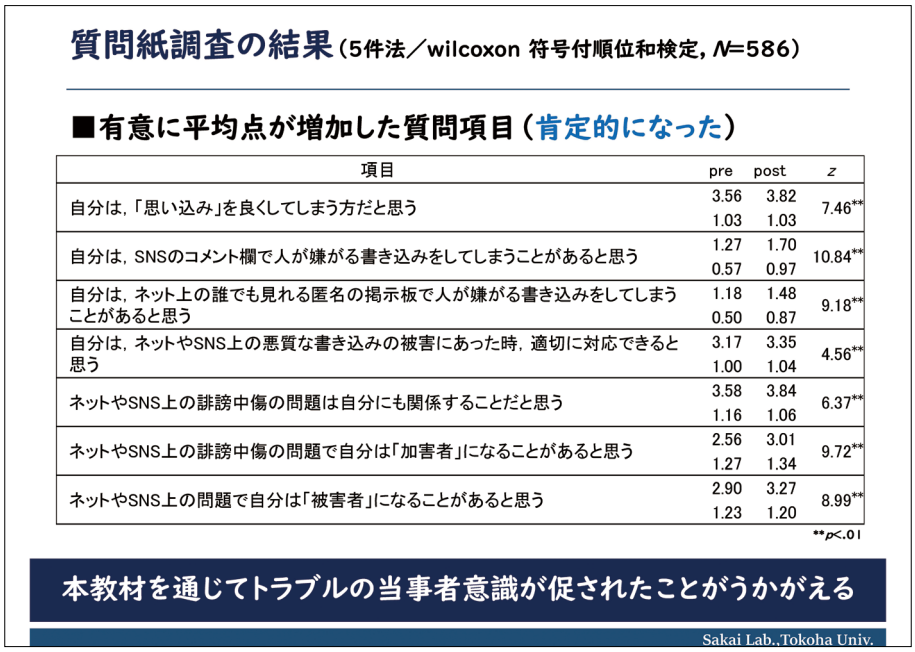
酒井氏）

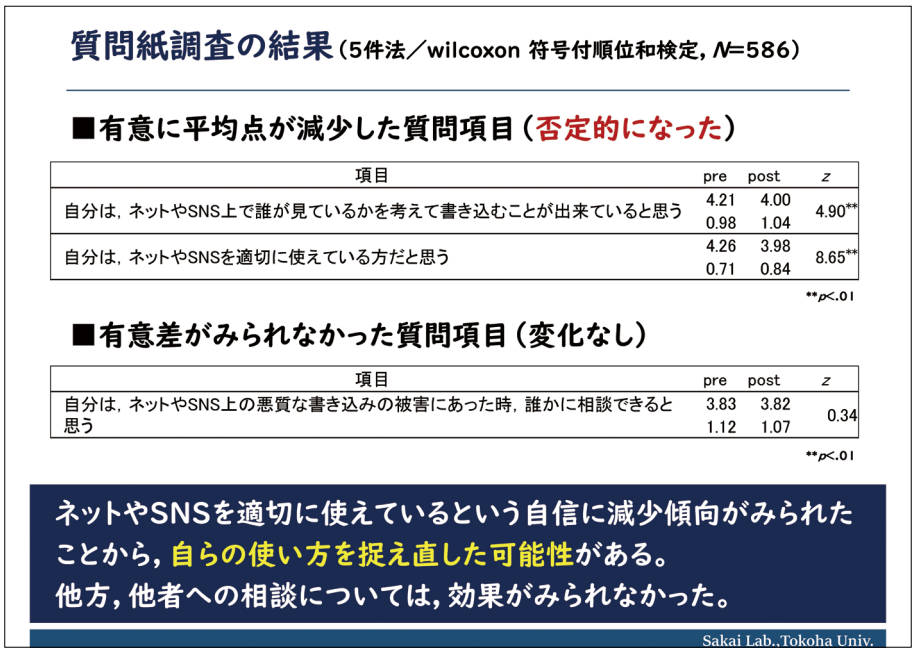
反応については、2025年に586名の高校生に本教材を使った授業をさせてもらった際に、授業の直前と直後にアンケートを取って、どのような意識の変容があったかを調査しました。

その結果、「肯定的な変化」としては、「思い込みをよくしてしまう方だと思う」「SNSのコメント欄で人が嫌がる書き込みをしてしまうことがあると思う」「ネットやSNS上の誹謗中傷の問題は自分にも関係することだと思う」など、当事者意識に関する項目が軒並み高くなっており、授業を通じて自覚が生まれたことがわかります。

逆に「否定的な変化」としては、「ネットやSNS上で誰が見ているかを考えて書き込むことができていると思う」「ネットやSNSを適切に使えている方だと思う」などは授業後に減少しており、

自らの使い方を捉え直したと考えることができます。両方の変化を併せて、本教材を活用した授業で一定の効果があったことを示す結果となっています。





日本安全教育学会第26回岩手大会「SNSの書き込みに対する「リスクの見積り方」学ぶ情報モラル教材の開発と評価」（酒井・西尾ほか）発表用スライドから引用

▶本教材を通じ、子どもたちにどのような力を身につけていってほしいと考えますか。

酒井氏）

リスクの見積もり方や考え方は重要だと思っています。現在文部科学省は、各教科において「見方、考え方」を身に着けることを重視していますが、これは情報分野でも同様です。見積もる力や想像する力、その中に相手のことを思いやる力、ネットの特性や周囲の人とどう関わるのかという

ことも含めて身に着けていくことが必要です。

一つひとつのトラブルに気をつけることも大事ですが、子どもたちには見方、考え方を総合的に身に着けて、上手に情報を活用できる人に育ってほしいと考えています。

西尾氏）

本教材は見極め方や俯瞰的に見るような視点のワークも入っていますが、その先にあるのは、想像力や判断力をいかに養うことです。善悪では測れないモラルを考えることで、見極める力を身に着けてほしいと思います。それが結果的にトラブル回避にもなり、情報をうまく使うことにもつながっていくはずです。

▶今後の構想・取り組みたいことについて教えてください。

西尾氏）

学校ではGIGAスクールが始まって、情報分野に関するニーズは高まっています。またAIの一般化も進んでいて、受験とは別軸で情報学習が重要になってきています。これからも新しいテーマや課題が出てくると思いますが、それらに向き合いながら、より活用してもらえるような教材をつくっていきたいと考えています。

酒井氏）

本教材は学校を対象としてますが、情報リテラシー教育が必要なのは子どもたちだけではありません。大人でも適切に使えていない人はたくさんいます。保護者や先生も含めて、子どもと大人が一緒に学べるような教材を開発して、家庭で消費者教育ができるような仕組みをつくっていきたいと考えています。

また、「この子にはこういう学習が必要」という形で、一人ひとりの個性に合わせた教育の仕組みができることが理想です。そのためには各自の情報モラルを評価する仕組みも必要です。そこも考えていきたいと思います。

▶最後に消費者教育に携わる皆さんへのメッセージをお願いします。

西尾氏）

本教材で扱っているネット書き込みのリスクは、避けて通れないテーマでありながら、実際に被害がないと向き合わない分野でもあります。子どもたちはこれからの社会を担う存在です。情報リテラシーを身に着けることで、今後被害を予防することはもちろん、情報を活用しやすい社会をつくっていってほしいと考えています。

酒井氏）

従来の消費者教育はお金に関することがメインでした。しかし現代社会では、「情報を消費している」という消費者としての自覚も必要です。情報をどう消費していけばいいのか、是非一緒に考えていきましょう。

▶ありがとうございました。

もっと知りたい方はこちら！

LINEヤフー株式会社　LINEヤフー　みらいプロジェクト　ホームページ：
https://mirai.landpress.line.me/